横田の空兵　熱射病で倒れた仲間を救う

When heat strikes: Yokota Airmen rescue a wingman in distress

October 11, 2024

By Senior Airman Samantha White
374th Airlift Wing Public Affairs

ミント・グリーン色の軽自動車に2人の男が乗り込み、ドアを閉めると車体が沈み込むように揺れた。外の蒸し暑さから解放されようと、エンジンをかけ、エアコンを全開にしたその時、車内に電話の着信音が鳴り響いた。アレクサンダー・デーリー上級空兵は、この電話が生死を分けるものになるとは思いもしなかった。

7月中旬のいつも通りの月曜の朝、デーリー上級空兵は第374整備群オペレーションセンターのコントローラーとして、そしてルームメイトのアンドリュー・ノーリング上級空兵も第374整備中隊の航空機燃料システム技術官として一日が始まるところだった。

電話のディスプレイには「ワイアット・エルスワースからの着信」と表示され、親友からの電話にデーリー上級空兵は特に気を留めることもなかった。

2人は2021年の初めにテクニカル・スクールで出会った。そこで2か月間共に過ごした後、韓国の別々の基地に赴任した。1年後、偶然にも2人は再び同じ横田基地に配属されることになった。

デーリー上級空兵はその時を振り返り、「ワイアットは夜勤明けで、朝ごはんを食べに行こうとしているかどうかくらいに思っていた」と話す。

電話に出ると、聞こえてきたのは激しく息切れた声だった。

「おい、、、息が、、、できない」

慌てて状況を把握しようとした。「ワイアットはどこにいる？何が起こっている？どうしたらいい？」

一緒にいたルームメイトに直ちにエルスワース上級空兵の住居へ車を走らせるように言った。到着すると、デーリー上級空兵は建物に駆け込み、施錠していないドアを開けると、エルスワース上級空兵が床に倒れているのを発見した。

「荒い息をしながら大の字になって床に伏せていて、体が麻痺している状態にあった。すぐに病院に連れて行かなくていけないと思った」とデーリー上級空兵は話した。

デーリー上級空兵はエルスワース上級空兵を抱えて、エレベーターに運び、下で待機している車へと向かった。そしてノーリング上級空兵と2人で、体が麻痺しているエルスワース上級空兵を車の後部座席に乗せた。「彼の体は板のように硬くなっていて、車に乗せるのも大変だった。乗っている間、彼は話もできなかったし、顔面はこわばり、口を固く閉じ、只々息を切らしていた」とデーリー上級空兵は話す。

そのまま第374医療群の救急センターへ急行し、2人はエルスワース上級空兵を病院の中に運び込むと待合室にいる人々の視線を集めた。医療従事者がすぐに彼を別室に入れ、鎮静剤を投与し、全身に冷たいシップを充てて処置を施した。

医療チームによる検査の結果、「熱疲労」だと診断が下りた。

デーリー上級空兵はエルスワース上級空兵の容態が安定するまで、数時間のあいだ隣に座り続けた。

エルスワース上級空兵が目を覚ますと、一連の出来事をこう振り返った。体力テストを終えて徒歩で家に帰る途中に体温が異常に上昇する感覚があった。汗が止まらず息ができなくなり、気絶しそうになった。ベンチに座り、息を整えようとしていると、それに気づいて2人の人物が彼に大丈夫かと尋ねた。2人目の人が彼の住居まで送り、部屋まで連れて行った。

第374整備中隊航空機燃料システム技師のワイアット・エルスワース上級空兵は、「誰が声をかけて助けてくれようとしたのか、自分の名前が呼ばれていたかさえ覚えていない」と振り返り、「とても感謝している」と告げた。

エルスワース上級空兵はその後、退役してアメリカに帰国した。2人の友人と離れ離れになっても、将来この出来事を忘れることはないだろう。デーリー上級空兵は「友達として当然にとった行動だったと思う。困ったときはお互い様だ」と語った。